

## 空手道詳説（18）

### 第2章 沖縄史の概説

#### 4 沖縄史の概略（その3. 第二尚氏王統の誕生）

##### (8) 尚真王の治世と禁武政策

##### エ 武器の取り上げ

これまで、琉球（沖縄県）の歴史に深入りしながら述べてきたのには理由がある。一つには、琉球人（沖縄人、ウチナンチュー）の気質と空手との関係で、どのような風土のもとで空手が生れ育ってきたかである。

二つには、中国拳法が基になり、琉球人によって独自の工夫が凝らされ空手として完成されたのか、それとも、中国拳法が伝わる以前から「ティー」（手）と呼ばれる徒手空拳の武技があつて、それが空手となって発展したのかで、これはこの国の歴史と無関係ではない。

この二点を含め、空手道の発祥と発展過程を探るには、避けて通れないのが琉球国の歴史認識でないかと思う。特に、尚真王の治世と政策は、尚真の死後約80年を経て島津藩が攻め込んできた大事変「島津侵攻」、更にその後260年余を経て、明治政府のもとで強制的に近代日本国家の中に組み込まれた結果、1872年（明治5年）尚泰（王）を藩主とする琉球藩設置に始まり、1879（明治12年）の沖縄県設置に至る「琉球処分」といわれる道を辿り、かつての琉球王国は消滅してしまう。長年の間、大国の明や清と日本（沖縄からみれば大和）との狭間にあつて、様々な苦難に満ちた歴史を観じないで語れないところがある。

尚真の父尚円王（在位1469～76年）は、第二尚氏王統を樹立したが在位7年にして崩じ、先に述べたように尚円の弟宣威が第2代王となったが、宣威は在位6か月で

廃位となり、尚円の嫡子尚真が 12 歳で第 3 代王となり、以後、母后・宇喜也嘉が権勢専横を振った時期を経て、50 年という長期にわたり在位して君臨した。

尚真は、父王尚円の築いた王統を守り、将来に向けて様々な施策政策を実行に移した。その主たるところは、母后・宇喜也嘉と関連させて既述したとおりである。

繰り返しになるが、若き頃の尚真は母后に圧倒され続け、成人後は次第に自らの考えをもって、画期的、あるいは先進的な方策を実行した勇断の王であった。

これらの政策を実行に移した王を臣民が支え、尚真即位以降 400 年を超す第二尚氏王統の土台は確立され、国勢を確実なものにしたと言われる。

だが、見方によっては、400 年を超す長期王統を継続させた土台を築いたのは尚真であっても、介入して誘導したのは島津藩と徳川幕府であることも念頭に置かなければならない。

尚真が実行した政策の中で最たるものとして、専制支配を強化するために行った中央集権であった。地方の領主（按司）とその家族を王府のある首里に集居させ、加えて武器の一元管理を実行したのが、後になって「禁武政策」と言われた武器の制限であったと伝わる。

按司たちを王府周辺に置き、武器を取り上げる。それでは軍備的に丸裸同然であるため、王に対する反乱の機会は極端に制限される。

按司の首里住いについて説明を加えるなら、城（グスク）時代（10～14 世紀）以降、土着性の強かった在来按司たちを士分に格下げし、王と血縁関係を有する王子たちを分家的に按司（領主）とするという計画的配置により、尚氏一族で周囲を固め、反体制側の裏面工作を許さない徹底振りであった。但し、その中で馬思良・国頭親方正胤を初代とする国頭御殿（くにがみうどうん）だけが、代々国頭間切（現：国頭村）の按司として、第二尚氏の血縁者分家以外で唯一例外的な存在であった。

馬思良だけ何故存続できたのだろうか。それは、初代王尚円が一農民として家族を抱え苦勞していた頃に、馬思良の母親から援助を受けたとか、第 5 代王の尚元（1528～72 年、在位：1555～72 年）が奄美大島遠征の際に病に倒れた時、馬思良から苦難を救われたなど、王家が受けた恩義が馬思良との関係を深め、国頭間切を安堵されてきたといわれている。

次に「武器の一元管理」についてだが、宮城栄昌著の「沖縄の歴史」（73 頁）を始め「武器の取り上げ」とか「禁武政策」という言葉は様々な著書や研究書に頻出する。

更に、「空手道・保存版」22 頁に掲載されている武道評論家・藤原稜三の談話によれば、この尚真による政策は初めてではないと語る。それは次である。

琉球において尚巴志王という人が沖縄本島を中心に三山統一という政治的な統一を成した時期に、反乱を防ぐために武器を禁じた。（中略）

日本本土から島津氏が兵力をもって琉球を抑えて代官を派遣した時に同じような意味でやはり武器の携行を禁じた。

一説によると、この琉球自身の三山統一の禁武政策と島津治下の禁武政策の両方によって、空手術が発達したという解釈もありますけれども、これは誤りであろうと思います。

尚巴志王（1372～1439年、在位：1422～39年）は第一尚氏王統第2代王であるから、藤原説では琉球の「禁武政策」は、尚真王と「島津入り」後と合わせ三回あったことになる。

尚巴志の治政時にどのような政策が行われたのか、歴史上の資料が皆無であるため計り知れないが、前々から一部研究家の間で「禁武政策」は3回という説は存在していた。

「島津入り」後とは、1609年（慶長14年）に薩摩藩が琉球に武力攻撃を仕掛け、琉球が敗北した後、島津藩は琉球に駐留して、武器の携行を禁止したことをいう。

本土の場合なら、豊臣秀吉（1536～98年）の「刀狩令」（1588年）が知られているが、これは農民（百姓）から武器を没収することによって、百姓一揆を防止するとともに、兵農分離による身分の固定化が狙いであった。しかし、尚真は王となって20年余を経た時期に「禁武政策」を敷いたのであれば、秀吉より90年近くも早かったことになる。

前述の二つを柱とする尚真の政策によって、王家に対する反抗勢力は陰に隠れてしまい、国民生活は安定し、文化や交易（特に中継貿易）などの興隆と相まって、尚真王時代の琉球は「黄金時代」と言われた。強固でかつ長期安定により、繁栄を謳歌するがごとき時代との評価であろう。

それでは、尚真王が行った「禁武政策」とはどんなものだったのだろうか。これまでの説によれば次の二つである。

一つには、按司の武器、即ち刀剣、槍や鉾、弓矢などを取り上げ、王府の兵器庫に保管して武器類の一元管理を行い、王室に対する反抗を未然に防ぐのが狙いとされた。

二つには、武器の取り上げによって反抗を抑えるばかりでなく、全ての国民は王の家臣団に組み込まれ、非常時には兵役を課せられる義務を生み、代わりに按司たちは所領を安堵され、家臣たちは給付を受けるといふ、未成熟ながら琉球国に封建社会が形成されたことを意味する。

尚真王の「禁武政策」を裏付ける根拠とされたのは、この項の冒頭で説明したように、1509年首里城正殿前の欄干に記された「百浦添欄干之銘」である。

ウェブに掲載の「琉球・沖縄の建築略史年表」によれば、1509年の項に次に記載がある。

首里城に百浦添（ももうらそえ）欄干之銘が造られる。

「宮殿の前面に欄干なく青石を削り左右の基壇に欄干を設置して、中華の宮殿の制にならう。欄干には動植文のさまざまな彫刻が施され、また、その傍らに銘を刻み、欄干の柱に題す」という。



太平洋戦争後に復元された首里城正殿

「百浦添欄干之銘」には、尚真王の業績を讃える 11 の項目が記されており、その中の一つが「禁武政策」の根拠された次の文章である。

もっぱら刀剣・弓矢を積み、もって護国の利器となす。この邦の財用武器は他州の及ばざることなり

この文言を基に、「武器をかき集めて倉庫に封印した」と解釈され、尚真王による「武器の取り上げ」があったと長く研究者の中で肯定されてきた。ウィベキディアさえ『地方の按司（豪族）らを首里に集居せしめて中央集権化を図るとともに、反乱を防ぐ「琉球版刀狩り」などを実施した』と書いてあったが、近年になって「琉球版刀狩り」のところは削除され、『中央集権化を図り、王権を強化した』と訂正されているからである。

琉球は独立国といっても、四方を海に囲まれた細長い小国である。もし他国に攻撃されたら逃げ場がない。そこで尚真王は「武器のない国」として、他国に対する侵略や反抗の意思がない非武装国家として、他国からの侵略を逃れようとしたのだろうか。もし、そのような意思が隠されていたとするならば、薩摩藩からの攻撃に敗れたのだから、平和な理想郷のイメージは「絵に描いた餅」になったので、効果は無に等しかったといえる。

ところが、近年になって、この武器一元管理政策の解釈に異論が唱えられはじめた

のである。その一例を挙げれば、琉球史研究家の上里隆史氏（1976年～）の著書「オモシロ琉球・沖縄史」70～71頁によれば次である。

琉球といえば、「武器のない国」としてイメージされる場合が多いと思います。平和を希求する尚真王が武器を捨て世界にさきがけて「非武装国家宣言」したとか、ナポレオンが武器のない琉球の話に驚いたというエピソードも、これらを根拠づけるものとよく引き合いに出されます。（中略）

「百浦添欄干之銘」という史料にはこう書かれています。

「もっぱら刀剣・弓矢を積み、もって護国の利器となす。この邦の財用武器は他州の及ばざることなり」

刀狩り説は、これを「武器をかき集めて倉庫に積み封印した」と解釈していました。しかしこの文を現代風に訳すると、何と「(尚真王は) 刀や弓矢を集めて国を守る武器とした。琉球の持つ財産や武器は他国の及ぶところでない」(他国よりお金と軍備を持っている)。尚真王は武器を捨てるどころか、軍備を強化しているのです。

実際に、1500年の王府軍による八重山征服戦争では軍艦100隻と3000人の兵が動員され、1609年の薩摩島津軍の侵攻に対しては、琉球は4000人の軍隊で迎え撃ち、最新兵器の大砲でいったんは島津軍を阻止しています。

尚真王が刀狩りをしたり軍備を廃止した事実はなく、この時期にそれまでの按司の寄せあつめだった軍団から、王府指揮下の統一的な「琉球王国軍」が完成したというのが真実だったのです。

尚真王の狙いは、それまでは王に味方する按司たちの寄せ集め軍団だったのが、中央集権化、とりわけ専制君主的色合いと封建制の萌芽が形成されたことにより、統一的な琉球軍の完成となり、王権が一段と強化されたのだと、認識を改める必要がある。上里隆史氏の語るとおり、「百浦添欄干之銘」の碑文を素直に読めば、誰にも異論はないと大方の人が思うであろう。

太平洋戦争の戦禍から奇跡的に生き延びた第一級品の証拠となる碑文を、長く正反対の意味に読み違えたのは何故だろうか。

そこには筆者ごときが立ち入ることのできない、極めて高度な政治的背景を伴う判断からに相違ない。

高度な政治的背景と言うなら、島津藩と徳川幕府きり有り得ない。琉球王府の役人は、碑文の文言はどうあれ、実際には「武器の取り上げ」があつて『尚真王以降は、武器の携行は禁止され、武器は王府の武器庫に厳重に格納され、非常事以外は明けてはならないと封印されてきた』と語り、琉球国は、他国を攻めたり、不当に利を貪るような行為は絶対にあり得ないし、非武装で平和主義を貫き、国民は守札門に象徴されるように礼節を守る国であると、一貫して主張（意図的に）してきたのだらうと推測せざるを得ない。

(この項、つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和 43 年 11 月 26 日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970 年 9 月 1 日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和 50 年 7 月 25 日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012 年 6 月 20 日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011 年 6 月 25 日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686 年 4 月 25 日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005 年 12 月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他 31 名、昭和 52 年 3 月初版発行、株式会社創造